

最先端のナノテク発表

志摩 界面粒界国際会議に200人

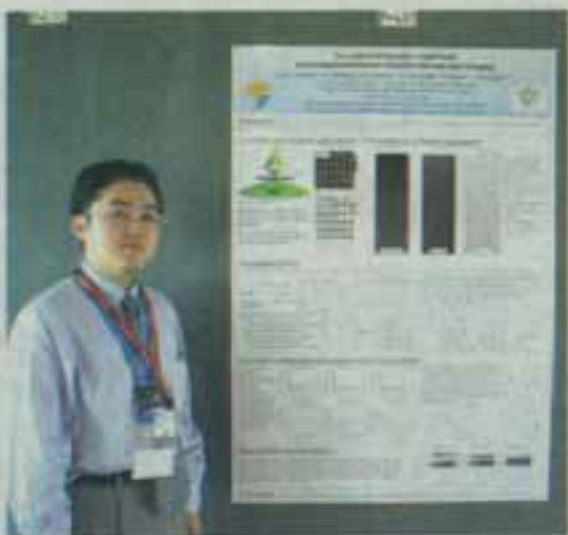
【志摩】第十三回界面粒界国際会議実行委員会（委員長・幾原雄一東京大学教授）は二十八日、志摩市阿

二日まで、口頭発表やポスター発表などが繰り広げられる。

児町の志摩観光ホテルクラシックで第十三回界面粒界国際会議を始めた。七月

界面粒界とは、物質の最小単位の原子と原子の境界をいい、この状態を制ったり、コントロールしたり、

加して、界面構造解析や、エネルギー・環境材料の構造などの口頭発表が相次いでいる。また、百二十件のポスター発表もある。ポスター発表では、幾原雄一東京大学教授らのグループが、最近開発した軽元素の界面における構造を直接観察する原子顕微鏡法が揭示され、注目を集めているという。



軽元素の界面における構造を直接観察する原子顕微鏡法の発表ポスター―志摩市阿児町の志摩観光ホテルクラシックで

理論計算で性質を予測する技術がナノテクで、リチウム電池の製造などに役立っている。会議は、

世界各国の研究者が討論や情報交換し、材料分野の発展と人材を育成することが狙い。

国内から約百四十人、海外から約六十人が参